
『ときメロ』マルチエンディング集

兔浪みなと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ときメロ』マルチエンディング集

【Nコード】

N8831Y

【作者名】

兔浪みなと

【あらすじ】

「『ときメロ』 - 恐怖のイケメン学園 -」の男性キャラ6人と、ヒロイン和希の両想いエピソードを集めたパラレル短編集です。（ただし第一話と二話は例外。）描き方は和希の一人称になったり、相手キャラ視点の三人称になったり色々。エンディング代わりということでラブラブあまあまを意識。週1〜2回のペースで更新を予定しています。

もう一つの和解（前書き）

拍手小話より。三人称、煌視点。

煌くん夢見すぎかもですが、思春期真っ盛りってことで大目に見てあげてください（笑）

もう一つの和解

入院生活は退屈で、大会が近いのにと焦る気持ちも強かったけれど、毎日とびきりのお楽しみもあった。

ベッドに半身を起こした煌は、読み終わった雑誌をサイドテーブルに置いた。ついでに目覚まし時計に視線を走らせる。

17:32。

煌の表情が、ふわりと和んだ。

あと30分ほどで、あそこの扉が開き、彼女がひよこつと現れるのだ。

煌にとって、彼女はずっと『天使』だった。

幼い日に一目惚れした彼女は、ただただ無邪気で可愛らしかったけれど。

二度目に出会った時以来、絶望の底から美しい歌声で救ってくれた彼女の存在は、大げさでなく、煌の生きる支えとなった。

大切すぎて、もし傷つけたらと考えると恐ろしくて、近づくことができないのはとても苦しかったけれど。

もし彼女が泣くようなことがあれば、影ながらも力を貸せる男になりたいと思ったから、勉強もスポーツもバイトも趣味も、あらゆることに全力でがんばろうと決めた。

どんな時も天使に誇れるような自分でありたいと思ってやってきたから、今の煌があった。

彼女の前に姿を現すことができないのは、わかっていたけれど。

それがこの春。まさかのまさかで、天使と同居することになった。

現実には彼の前で生活を始めた彼女、『羽鳥和希』は……彼がぼんやりと想像していた『天使』とは、ずいぶんかけ離れた少女だった。想像の中ではいつも穏やかに微笑んでいるだけだった彼女は、実にめまぐるしく感情を表現した。

怒って焦って呆れて泣いて。そして、いつぱい笑った。

不可侵の存在だっただけに、勝手に憐く繊細なイメージを抱いていたのだけれど、とんでもなかった。

清楚な外見に反して、言葉遣いはめっぼう悪くて。

やたらと根性と度胸があって、男前で。だけどドジで抜けてて、方向音痴。

いつも元気で前向きだけど、実は涙もろくて暴走癖があって。

ツッコミ属性かと思えば超天然。料理の腕は壊滅的。

ガードが固いようで、妙に隙だらけだし、冷たく拒絶したかと思えば反則的に可愛い言動で翻弄する。

自分の浅はかな幻想を粉々に打ち砕く意外性の連続で、おもしろくて仕方なかった。

彼女と過ごす日々、煌は内心自分でも呆れるくらいハイテンションで……『和希』に惹かれていった。

自分の作った料理を幸せそうに食べてくれる、素直な笑顔。

他人のために心から怒って泣いて喜ぶことができる、心の温かさ。

自分が思い描いていた安易なイメージなんかより、ずっと魅力的で、愛しい、世界で一人だけのかげがえのない人。

客観的にみたら寒いだろうからそうそう人には言えないけど（中学の頃うっかりオーナーに漏らして爆笑された）、やっぱり和希は、

煌にとって天使だった。

ただ……全国大会が近付くにつれて、彼女の様子がおかしくなってきたのが、気がかりだった。

以前は見せることのなかった物憂げな表情。

何かをこらえるような、寂しそうな面差し。

煌の視線に気付くと、すぐになんでもないように笑顔を作って誤魔化されてしまうけれど、そんな時の彼女は、やけに儚く見えて、ともすればふっと消えてしまいで……そこまで考えて、大きくため息をつく。

縁起でもない。竹取の姫でもあるまいし……今更また、彼女を偶像化するつもりか。

そう自嘲しても、不吉な予感にかすかに粟立った肌は、なかなか治まらない。

トントン。

響いたノック音に、少しホツとしながら、「どうぞ」と促した。

このうつうつとした気分を切断してくれる訪問者は、誰であれ歓迎したい。

そう思ったが、現れたのは、あまりにも想定外の人物だった。

「旺真……？」

犬猿の仲のはずの黒川旺真は、仏頂面でギロリと病室を見回すと、フンと鼻を鳴らした。

「よくもこんなウサギ小屋で養生できるな」

憎まれ口にも、思わず苦笑がもれた。

以前は腹が立ったものだけど、「あいつは素直じゃねーんだよ」と和希に教えられてから、煌も見方が変わった。

悠斗が更にひねくれて毒づいていると解釈すれば、なるほど、そうなのかもな、と。

母親がやっていることの負い目から、逆に旺眞には自分も攻撃的になる向きがあったかもしれない、と冷静に分析もしていた。

……こんな風に考えられるようになったのも、今が満たされているからなんだろう。

「なんの用だ？」

のんびり尋ねると、旺眞は無言で何かを差し出した。色鮮やかなフルーツが盛られた、籠^{かご}。

……驚きのあまり、かなりアホ面になってしまった自覚はあった。

まさか、見舞い？ あの、黒川旺眞が？ 毛嫌いしてたはずの、俺に？

「あの女は、俺の追っかけだった」

むすっとしたままそう言って、煌が籠を受け取るや、用は済んだとばかりにくるりときびすを返して去ろうとする。

「旺眞！ ……ありがとう」

あわてて呼び止め、その言葉を投げかけると、旺眞は横顔だけ振り向いてうなずいた。

閉じた扉をしばらく呆然と見つめていた煌は、やがて、ゆっくりと視線を手元の籠に戻し、プツと噴き出した。

笑つと傷に響くから、必死で抑えようとしたけれど、止まらない。引きつるような痛みで思わず涙目になりながら、実は、感動していた。

煌の知っているあの男は、とにかく自己中心的で傲慢で。他人への配慮など微塵も持ち合わせていなかった。

それが、今は自分のファンがやった事にまで責任の一端を感じるようになるなんて。いや、この果物籠には、また別の気持ちも含まれていたのかもしれない。

和希を守ったことへの、感謝。

旺真をここまで変えたのは、間違いなく、和希なのだ。

暗闇に一人で立っていた魔王に光を当て、周囲の視界をあらわにした。

「……やっぱ、あいつはすごいな」

そう呟いたとき、新たな足音が廊下の向こうから聞こえてきた。病院なので、音を立てないように注意しているけれど、鋭敏な煌の耳は、すぐに反応する。

だって、あれは、大好きなあの子の音。

トントン

「どろぞろ」

扉の隙間から、まずさらりと揺れる茶色がかった髪がのぞき、大きな瞳が煌を見とめると、あどけない面立ちが屈託なくほころぶ。無機的な病室の光景が、パツと明るくなった。

「煌」

名前を呼ばれることで、からだじゅうが目覚めるような感覚を味わいながら。

煌も愛しい彼女の名前を唇にのせた。

「待ってたぜ……和希」

イメージイラスト集

ひなむうさん (<http://ameblo.jp/ninabo>
x/) からいただいたイメージイラストです。

和希

> i35994 | 3393 <
帰還ENDと思いきや、最後の最後で作者も想定外の全員キープE
NDをもぎとつた、どこまでもあなどれない乙ゲマスター。

静流

> i35997 | 3393 <
アンニユイな表情萌え。静流はギターいっぱい持つてると思います。
株で稼いでお金持ちなので。

悠斗

> i35993 | 3393 <
魔王には届かないながらもなかなか熱い支持を集めている悠斗。
風呂上りで眼鏡装備とかお得感半端ないWWパワーアップしてます、
ひなむうさん……！ゴチです！

Episode 1 魔王

カランカランと軽やかな音と共に、店の焦げ茶の扉が開く。いらっしやいませ〜と振り返ったおれは、目を丸くした。

「旺真……来たのか」

先週からこのカフェでバイトを始めた、と言う話は昨夜電話でしたけど、まさか昨日の今日でやってくるとは思わなかった。

魔王は入り口でたたずんだまま、まじまじとおれの全身を凝視めがめしている。

襟元えりもとにクラシッくな細リボンを結んだ白いパフスリーブブラウスに、チョコブラウスのタイトなミニスカート、肩にフリルのついた赤×白ドットの胸寄せエプロンと、おそろいのカチューシャ、白のニーハイソックス、黒のストラップシューズ……。

可愛らしすぎる制服があまりにも柄じゃない自覚はあるから、なんとバツが悪い。「そんなに見るなよ」と顔をしかめてみせた。

「キッチン志望だったんだけど、こっちのが合ってるって押し切られてさ。っと、お席にご案内いたします」

厨房の影に立つ店長の視線に気付き、営業モードに入る。

「和希ちゃん〜お水ちょうだい」

「はい。ただいまお持ちします」

「和希ちゃん、こっちもお願い〜」

「追加オーダーいいかなあ？」

ファンシーな内装で女性人気が高そうな店かと思いきや、日に日に男性客も増えてきた気がする。ちょっと馴れ馴れしい常連さんには内心げっそりするけど、仕事だから仕方ない。

立て続けの呼び出しに忙しく動き回り、やっと一段落付けて魔王のオーダーをとりに行くと、なにやらこの男、全身から黒い霧もやを立ち上らせていた。

「……和希。いますぐこの仕事をやめろ」

はああ？

「いきなり何言い出すんだよ」

「おまえはこのような下賤げせんな店で働くべき女ではない」

「バツ……バカ言うな」

ビシリと響き渡った魔王の声に、焦って厨房を振り返ってから、小さくため息をつく。

「店長に聞こえたらどーすんだ。ま、確かに制服はちょっとスカ―ト短すぎとは思っけど、そこまで言われるほど感じの悪い店でもねーだろ？」

「こんな胸糞むなくそ悪い店はそうそうあるまい。最悪だ。さっさとやめろ」「じゃあとつとと帰れ。何が気に入くわねーか知らねーけど、今、店の雰囲気ふんいきを悪くしてるのは間違いなくおまえだぞ」

小声ながらもきっぱりと言い切ると、魔王は忌々しまごましそつに舌打ちした後、「エスプレッソ」と不機嫌ふきげんそのもので告げた。

その5分後、店内で乱闘事件（というより一方的な暴力事件）が発生し、おれはわずか8日でバイトをクビになったのだった。

「おい……待てよ、旺真！」

完全に日も沈み、ぼつりぼつりと外灯が点灯する歩道。

早足ですんずん遠ざかる魔王にようやく追いついて、正面に回り込む。

道路を過ぎ去っていく車のヘッドライトが、まるで美術彫刻のような完璧な容貌を照らし出して、また離れていった。

ハアハアと弾む息を整えてから、ぐつと両手を握り締め、仏頂面をにらみつけるように見上げる。

「……何か言うことがあんだろ？」

「腹が減った」

「そうじゃねえだろ！」

大声で怒鳴りつけても、魔王はふてぶてしく腕組みしたまま見つめ返すのみ。

突然客の一人に殴りかかったこいつは、その男のカメラを破壊。更に襟首えりくびを持ち上げ2発の拳をお見舞いしたところで、おれの制止の声でようやく落ち着いた。

被害者の客は解放されるや悲鳴を上げて逃走。店内にいた他の客もすっかりおびえて、潮が引くように出て行ってしまった。

血相を変えてとびだしてきた店長は、鬼気迫る魔王の一瞥いちべつに固ま

つていたが、やがて魔王とおれを交互に見た後、一言解雇を申し渡した。

魔王がテーブルに放って帰った札束は慰謝料いしやうりょうとしては十分すぎる額だったと思うが、一切の釈明もせずに店を飛び出したこいつは、やはり横暴以外の何者でもない。

「説明しろ。おまえは短気で馬鹿で傲慢で自己中でわがままでナルシストのエロエロ大魔王だけど」

「殺されたいのか？」

「理由もなく暴力を振るうような奴じゃねーだろ。ちゃんと話せ」

瞳を見据えながら真剣に訴えると、魔王はふうーっと怒りを吐き出すように大きく息を漏もらした。いつもよりも更に低い声で、ぼそりと言っ。

「あの下衆げすは、おまえを盗撮していた。下から」

「……………そーゆー時は、カメラを没収して警察に突き出せ」「現像されたいか？」

すごい剣幕で返されて、言葉に詰まった。

「……………早く言えよ。そしたらおれも、一発殴ってやったのに」

壁にもたれかかり、左の掌に右の拳を打ちつけながら矛盾した台詞を吐くおれに、凍り付いていた魔王の表情が少しだけ和らいだ。

「おまえがバイトなどする必要はない。欲しいものがあれば、なんでも買ってやる」

「そーゆーのは嫌。結婚してるとかならまだしも」

「ならば籍せきを入れるか？」

なんでもないように言われた一言に、一瞬呆気にとられてから、カーッと全身が火照りだす。

「馬鹿。てかおまえまだ17だろ？ 男は18にならねーと結婚できねえって法律で決まってるだよ」

顔を背けながら返したところ、魔王が笑う気配がした。

この野郎……人をおちよくりやがって。

「『ただ一人を想い合うなど幻想』」

不意におれが紡ぎだした言葉に、魔王の眉尻まゆびが怪訝けげんそうに上がった。

「『結婚など契約でしかなく、永遠の愛などというものは現実を見ない愚かものの世迷いごとよ』……なんて言っただけ、誰かさんは？」

ニヤリと唇を吊り上げながら指摘してやったところ、魔王はしばらく静止してから、言った。

「忘れた」

「おまえな……」

呆れて漏らした吐息は、覆おほいかぶさってきたもう一つの吐息に混ざり合った。

絡まる熱とともに全身に伝わり広がっていく、甘美な旋律。

頭の芯がじんと痺れて、からだじゅうの力が抜けていく。
鼓動だけが、やばいくらいに大きく鳴って、こいつにも聴こえて
んじゃないかと思った。

陶然としたまま余韻に浸っていたら、離れたと思った唇がそのま
ま首筋をたどりだしたので大いに焦る。

「ちょ、待て、まださすがにそれは無理！」

「なぜだ。おまえも俺を好きだと言った。何をためらうことがある
？」

「色々ある！」

必死で押しのけ、身を翻して間合いを保った。

「まだ心の準備もできてないし、外だし、そもそもそーゆーのは結
婚してからじゃないとダメだと思っし」

「……おまえは昭和の女学生か？」

「それに、キモい！」

瞬間、ピシリ、と魔王の表情が固まった。

やべ、言葉足らず！

「いや、おまえじゃなくて、おれが……。前からそうだけど、おま
えに触られると、普通じゃなくなるんだよ。最近はどうどんひどく
なって、なんかからだの奥が熱くなってゾワゾワして、頭パンクし
そうになって、自分で自分がわけわかんなくなってキモいんだ。キ
スだけで脳みそ溶けそうになってんの……」

「……誘っているとしたか思えないが？」

またズズイッと迫ってくる魔王。

ギャー。食われる！

「駄目だったら駄目！ これ以上を求めるなら別れる！」

有無を言わせぬ口調で宣言すると、魔王はぶすつとしたまま渋々と、おれを解放した。

はあーっ、よかった……。

「できねーからって浮気すんなよ？」

一応釘をさしておくとして、フンとつまらなさそうに鼻を鳴らす魔王。

「おまえはカボチャに欲情するか？」

……カボチャ???

首をひねるおれに、魔王は「まあよい」と艶あでやかに微笑んだ。

「すぐにその気にさせてやる」

誰が、と返したかったが、投げかけられた流し目の威力に不覚にも押さえ込まれた。

「今宵食すのはおまえの手料理ということで勘弁してやろう。俺の家で何か作れ」

「おれが？ ……まあいいけど」

「そういえば、キッチン志望などいつていたが……おまえの料理が食べられるのは俺くらいなものだぞ？」

「なっ……おれだって成長してんだぞ！」

「どうだか」

魔王は実に愉たのしげに口元に薄い三日月を刻むと、悠然と前を歩き始める。

むっ、とむくれていたおれだったが……不意に鼓膜を震わせた澄んだ音色。

思わず聞きほれてしまうような、ハツとするほど美しく響くその口笛のメロディが『消臭力』であることに気付いた瞬間、盛大にふきだしてしまった。

ああ、畜生。 大好きだ！

Episode 1 魔王（後書き）

魔王の目にはもう他の女はカボチャくらいにしか見えないそうです。

Episode 2 静流

夕刻のJRの環状線。

満員状態の車内、見知らぬ他人と密着し、移動もままならない状態は、当然心地よさとは対極にあったが、脳内に浮かんだメモディを辿ることに集中してやり過ごす。

ここでギターのアルペジオ。キーボも控えめなエコーを効かせたストリングで……

一心不乱に音の世界に潜水していた紫葉静流の、ぼうつと夢見るようだった綺麗な面立ちが、不意にヒクリと不快気に引きつった。

腰から尾骨にかけての辺りを盛んに行き来する、掌。

何気なさを装いながらも痴漢行為に及んでいるのは、後ろに密着した、ガタイのいいサラリーマン風の男だった。

女と間違えてるのか男とわかって触ってるのかは知らないが、どっちにしる最低だ。

キモイキモイと鳥肌を覚えつつ、こんなことならやっぱりと1時間ほどずらして帰ればよかったと己の失策に舌打ちしつつ、頭では冷静に算段を練る。

避難しようとしてできないこともないが、却下。泣き寝入りは性に合わない。絶対現行犯で警察に突き出して慰謝料ふんだくって社会的地位を剥奪してやる。

男を触るほど欲求不満なのかとこの場で告発して、すぐにやめさせると同時に恥をかかせてやってもいいが、見るからに単細胞で知性の低そうな人相だ。逆上して騒がれても面倒くさいし、自分もできれば無駄な注目を浴びるのは避けたい。

次の駅はこの時間なら駅員がこの車両の停車位置そばに待機して

いたはずだから、着いた途端こいつを引きずり下ろして引き渡すのが今回は一番スマートだろう。幸いポジションも扉脇。人の流れを利用すれば下車は難しくはない。

しかし事をスムーズに運ぶためには目撃者が欲しい。隣に立っている、人の良さそうな中年男性に訴えて、事態を把握させてから次の駅で一緒に下車してもらおう。下手に車内で揉めたくはないからタイミング重要。行動に出るのはあと約2分後か。この痴漢が飽きる気配は幸か不幸か今のところないし。

めまぐるしく最善の方法を模索していた静流の意識は、しかし、威勢のいい少女の一声で一気に現実に引き戻される。

「おいオッサン、何してんだ！」

……おいおい、ちょっと待ってよ。

絶対に聞き間違えようのない、その声。

それでも信じられない気持ちで振り返った静流の瞳に映ったのは、少し離れた場所から、迷惑そうな周囲の視線にもたじろぐことなく人ごみをぬって近付いてくる、一人の女子高生。

「今すぐそいつから離れる、この変態！」

怒りに燃える瞳で痴漢をにらみつける彼女の凛々しい姿に、静流は思わず片手で顔を覆い、ガクリとうな垂れた。

いくらなんでも、これは、男前過ぎるでしょ、センパイ。

和希に見咎められた痴漢男は、案の定逆ギレしてわめきだした。

プラン変更、車内で徹底的に男を糾弾^{きゅうたん}して大恥をかかせ、駅に到着するタイミングに合わせて怒りを最大限まで煽^{あお}る。完全にぶちギした馬鹿は下車した静流を追って自分から電車を降り、殴りかかるうとしたところで駅員に捕獲された。

「……………ありがとう。時間とらせちゃってごめんね。このお礼はまた今度……………じゃあ」

駅員による取調べから解放されると、和希にそれだけ言って、静流は駅の出口へと向かった。

「おい、待てよ、静流！」

和希があわてた様子で追いかけてくるのがわかったけれど、すたすたと足を進める。

「大丈夫か？ 憂さ晴らしなら付き合っぜ」

「……………」
「おまえの毒舌、すごかったな。あのオッサンが口挟む暇もない怒^ど涛^{たう}の口撃」

「……………」
「見つけたときは、恐くて声が上がられないのかと思ったけど」「下手に車内で騒ぎを起こしたくなかっただけだよ。もっとスマー^トに処理するはずだった」

自分の声のあまりの冷ややかさに内心まずい、と思ったけれど、止められなかった。

和希が息を呑むのがわかり、フォローの言葉が一瞬でいくつも脳内を駆け巡ったけれど、一つも唇に上ることなく、振り向けないまま、早足も止まらない。

「……おれ、余計なことした？」

落ち込んだような囁きささやが耳をかすめたが、静流は無言のまま、駅を出てどこへ行く当てもなく歩を進める。

まさしく最低最悪の気分だった。

痴漢ちかんされている現場を好きな女の子に目撃されて、しかも助けられる。

傑作の喜劇だ。なんという屈辱。

あまりにも情けなくてやりきれなくてなぜか大声で笑いだしたくなる衝動を、必死で押さえつける。

ああ胸糞むなぐそ悪い！

ムカつく！

世界なんて今すぐ滅んでしまえ！

どれだけ歩いて、和希は黙ったままついてくる。

いら立ちが頂点に達して、振り返って、言ってしまった。

「ウザい。ついてくんない」

「……………んだよ、馬鹿！クソガキ！」

かあつと顔を紅潮させてそう叫ぶと、ダツシュで去っていく和希。

しばらくその場に立ちつくしていた静流は、やがて、ふらつとかたわらの塀へいにもたれかかり、深々とため息を吐いた。

自己嫌悪で、いよいよ泣きたくなってきた。

……本当に、ガキだ。

おかしい。自分はこの奴じゃなかったはずなのに。もっと冷静で、落ち着きたい男になりたいと思ってるのに、彼女の前だと、感情に振り回されて、逆にうんざりするくらい子どもになってしまう。

どうしてあんなこと言ってしまったんだろう。完全な八つ当たりだ。

こんなんじゃない、彼女に愛想つかされるのも時間の問題……いや、すでに見限られたかも。

それに、あの時の、和希の顔。傷つけた。

今頃、泣いてるかもしれない。オレのせいだ。

泣き顔を想像するやいても立つてもいられなくなり、静流は和希の去った方角へと全速力で走り出した。

心の中で自分を盛大に罵り、和希に謝り倒し 角を曲がった途端、誰かと危うく衝突しかかって、肝を冷やす。

「すみませ……センパイ!？」

「!？ あ……と……」

突然角から現れた静流に、和希も大きな目をパチパチしていたが、やがて、バツが悪そうな曖昧な表情で「駅、こっちじゃなかった……」と呟いた。

「……し、静流!？ どうした?」

「……いや、急に力が抜けて」

思わずその場にへたりこんだ静流だったが、次第にどうにもおかしくなってきた、ヒクヒクとほおが震えだす。

「……もう駄目。あははははははは」

「なっ……悪かったな！ どうせ間抜けだよおれは！」

「……ごめん。一緒に帰ろう」

目尻に残った涙をぬぐってから和希の手を握って、先導するように歩きだした。

敵わないなあと思った。

悔しいけど、和希には振り回されてばかりだ。

というか、オレが空回りしてるだけ？

ほんと、カツコ悪い。

あの両親を間近で見て、愛という理不尽な感情に振り回される怖さや滑稽さはよくわかっていた。だから、恋愛はあくまでゲーム、本気にはならないと決めていたのだ。のめりこんだら負けだと思っ。。

でも、彼女になら、もう、負けでいい。

振り回されるのも楽しいと思ってしまうなんて、まったく、ただだけベタ惚れなんだろう……。

「ごめんね。イライラして、センパイに当たっちゃった」

「おれのほうこそ、ごめん。静流の気持ちも考えずに……あの男がやってることに気付いた瞬間、『おれの静流に何しやがる』って力ツと頭に血が上っちゃって」

「センパイ、やっぱり思考も行動も男前すぎるよ」

ま、そーゆーところも大好きだけどさあ、と苦笑してから、静流は一転、氷の口調で言い切る。

「あの男だけは絶対許さない。後日また法律事務所を通して絶対最高額の慰謝料ふんどくってやる」

「……おまえ、ほんと色々しっかりしてるよな」

「ぶっっちゃけ、痴漢に遭うの初めてじゃないしね……美少年は大変だよ」

「自分で言うな！ ナルシストかよ！」

笑いながらのツツコミに、うん、と静流は臆面おくめんもなくうなずいた。

「オレ、自分の顔好きだよ。だって……センパイ、オレの顔好きでしょ？」

「……！」

みるみる真っ赤になる和希を、クスツと口元をほころばせながらのぞき込む。

「だから、この顔に生まれてよかったな〜って、今は心底そう思う」

「か、顔だけじゃねーし」

「え？ じゃあどこが好き？」

「……性格」

「具体的には？」

「ぐっ 具体……そんなの言えるかよ！」

頭をブンブン振って恥ずかしがる和希をたまらなく愛しく感じながら、静流はまた前を向いて歩き出した。

さっきまでどん底だった精神状態が、今ではずいぶん復活してい

た。まー、災難にあつた気持ちは拭ぬぐいきれないけど……。

「静流」

呼ばれて、振り向いた拍子に。

……え？

思考回路が、ストップする。
唇に触れた、柔らかい何か。

「……これで機嫌直せよ」

ほおを桜色に染めながらきひひ、と悪戯つぽく笑う和希に、静流は呆然としたまま、うなずいた。

うわー。うわー。うわー。

変なの。たかが、キスなのに。

うわー。うわー。……うわー。

「ちょっと、嬉しすぎて、死にそうなんだけど……」

「ばっか、大げさ。行くぞ」

照れたように顔をふいと背けて、今度は和希が早足で先へ行く。

「センパイ……曲がる方向、逆」

うう、と情けなさそうに身をすくめる和希に破顔はがんしながら、たぶ

んこの人にはこのまま一生敵わないんだろう、としみじみ思う静流
だった。

Episode 3 王子 (前書き)

和希視点。糖度はたぶんNO.1。

12月上旬の美楠学園高等部は、いまだかつてなくどんよりと淀んだ雰囲気に包まれていた。

授業中突然泣き出す女生徒が多発し、休み時間も忍び泣きや悲哀の音がそこかしこから聞こえてくる。

「なんで？ どうしてこんな悲劇が……」

「王子先輩のいない学校なんてくる意味がない……！」

最初は何事かと思っただが、耳に滑り込んできた女子の嘆きに、そーゆーことかと納得した。王子がイギリスへ留学する、今まで徹底的に伏せられていたその事実が渡英を目前に公となり、このお通夜ムードを引き起こしたらしい。

「王子先輩のファンの多さと支持の熱さに改めて驚くわねえ」

中休み。ハンカチで目を抑えるクラスメートたちを窓際の席からぼんやりと眺めていたら、かんなが近づいてきた。

「商魂たくましい購買部では、一足早い王子先輩ご卒業の記念品として『北王子梓茶第2ボタン』の発売を決定したらしいわよ。先着100名様限定」

「なんだその意味不明商品……」

ずる、とほお杖をついていた手からあごをずり落とすおれに、かなは「でもこれが予約問合せ殺到だって！」とケラケラ笑っていたが、ふと真顔になった。

「大丈夫？ ……一番泣きたいのは、あんなんじゃないの？」

「……………」

「一緒においでって言われたんでしょ？ 留学費用も生活費も住む場所も全部責任持つとまで言ってもらったんなら、甘えちゃえばいいのに」

「そんなわけにも行かぬーよ。お互いまだ未成年なのに」

次の授業の用意をしながら淡々とそう答えるおれに、かんなが「意地っ張り」と肩をすくめたその時。

急に周囲の空気がざわつと揺れた。

クラス中の視線が、いつせいに扉の方に集中する。

「和希ちゃん、王子先輩が呼んでるよ」

ほおを紅潮させ接近してきたクラスメイトの言葉にうなずきを返し、何気ない風を装って歩き出した。そこに待つ柔らかい微笑みに胸の高鳴りと痛みを同時に覚えながら。

いきなりで悪いんだけど、と切り出した王子は、おれに、その日の夕刻に開かれる北王子グループの関連企業のパーティーへの同伴を頼んできた。

「父に急用が入って、僕が代理で出席することになったんだ。学校が終わったらすぐに一緒に車で会場に向かってもらえないかな？」

堅苦しい場は苦手だけど、おれが承諾したのは、限られた時間を少しでも一緒に過ごしたかったから。

控室で、あいつが手配したらしい、すそが配色ティアードになった上品なミルクティー色のミディアムドレスにファーボレロを羽織

り、キラキラ光る石（もしやダイヤモンド？）がいくつも飾られたカチューシャをつける。

扉の外に出ると、待ち構えていたスーツ姿の王子が満足そうにならずいた。

「じゃあ行くつか、僕の妖精」

「よ……。おまえ、いい加減その大げさな褒め言葉ひかえようぜ」

「大げさなんてことないよ。君はもっと自分の魅力を自覚するべきだ」

エスコートされて、パーティー会場へ。

「この段差はちょっと急になってるから、気をつけてね」

階段ではそう言っつて、先に2段下つておれが転ばないように手を差し伸べてくれたり……。基本なのかもしれないけど、いちいち自然にこなすから、感心してしまう。

おれはこういう公式な場所での立ち居振る舞いなんかは全然知らないけど、逐一王子が隣でそつと教えてくれるし、へましそつになつても完璧にフォローしてくれるから、次第に緊張もほぐれてきた。

「ほんとエスコートうまいよな、おまえ」

「お褒めにあずかり光栄です。隣にいる女性をいかに更に美しく見せるかが、男の力の見せ所だからね」

さらりと言いきる王子は、やはり根っからの王子だと思う。

その後、挨拶回りに付き合つて慣れない愛想笑いを振りまきなが

ら、大変だなあと心底思った。

あいつは万事に如才なく応対してるけど……笑顔の裏の重圧は、おれには想像もつかないほどに違いない。

トイレに抜けさせてもらった後、そのまま少しだけロビーのソファに腰かけて一息ついていると、気遣うような表情の王子がやってきた。

「ごめんね。疲れただろう？」

「うんにゃ、平気平気。行くか」

勢いをつけて立ち上がったが、王子はゆるゆると首を振っておれの肩に手を置いた。

「一通り終わったから、大丈夫。もう少し、ここにいよう……二人で」

異論は全くなかったけれど、向けられた笑顔が 社交用のものとは全然違う屈託のない笑顔が眩まぶしくて、同時にまたズキンと胸が痛んで、おれは素っ気なく一回うなずきを返して視線を外した。

「それにしても可愛かったなあ、和希ちゃん。『恋人です』って紹介するたびに赤くなってるんだもん」

「それはおまえがつ、訊かれもしないのに皆に言いまくるからだろ、恥ずかしい！」

「ふふっ、自慢の彼女だからね。つい……」

「ついじゃねえって」

おれが何を言っても、隣に座った王子は楽しくて仕方がないというようにニコニコと笑っている。

この笑顔がもうすぐ見れなくなる……そう思うと、どうしようもなく寂しかった。

こいつは一か月に一度は会いにくるから、なんて、何でもない事のように言っているけど、片道12時間という距離。忙しい中、それだけの時間を作ることは、色々な面で大きな負担だろう。

やっぱり、おれもついていく方がいいんだろうか。でも、目的も持たずに全てを依存するような形で今その選択をするのは、どうしても違う気がした。

おれのがままで、結局、王子にも辛い思いをさせることになる……。

黙り込んでしまったおれを、しばらく同じように無言で見つめていた王子だったが、やがて、そつと手を伸ばしてきた。

おれの髪をゆっくりと梳きながら、ちよつとしんみりした優しい口調で話し出す。

「君はこういうところをあまり好きじゃないのはわかってるんだけど……少しでも、一緒の時間を過ごしておきたくて」

「……うん。おれも、同じこと思ってた」

「今はこうして君と通じ合っていることを感じられて、幸せでおかしくなりそうなくらいだけど。物理的な距離がそのまま心の距離になった、なんて話はいくらでも聞く。会いたいときにすぐに会えるわけじゃなくなるから、寂しさに負けて、気持ち揺らがなくても限らない。人の心は弱くうつろいやすいものだから……誰にも、保証はできないだろう?」

端麗な面立ちを翳^{かげ}らせながら語る王子の言葉は、まさしくおれの不安をそのまま代弁したもので。

でも、実際にこうしてこいつから言われると、のどがヒリヒリし

て鼻の奥がツンと痛くなつて　危うく、涙が零れそうになつた。
うつむいて、まばたきしてこらえていたら……

「なんてね」

一転してやけに明るい声が響いて、おれはぽかんと顔を上げた。
王子はクスクスと肩を揺らしながら、「大丈夫だよ」とウインクする。

「離れていても、君が不安に思うことはない。僕には和希ちゃんしかいないんだから」

「な……じゃあ、今は……」

「ごめん、強がる君が愛しくて……ちょっとだけ、泣き顔もみてみたくなつちやつたんだ」

……この、男は……！

何しれつと爽やかにS発言してんだ！　いや知ってたけどな、おまえのそーゆー本性は！

「ふざけんな！　人のことおちよくりやがつて……」

真つ赤になつて拳を握つたが、王子は動じる様子もなくおれを抱き寄せると、あるうことかひたいに不意打ちのキス。

んな！？

「君が僕と一緒にいけないと思うのなら、きっとそれが正しいんだ。君が僕に対して　そんな必要ないんだけど、悪いと思つていふことはわかっているし、離れることを寂しく感じてくれることもわかつてるから、心配しないで。僕は、君と、君の選択を信じてる」

「……でも、間違つてるかも、しれない」

こいつがあまりにも揺るぎないから、うっかり、甘ったれた言葉を吐いてしまったけれど。

「その場合は、気づいたときに、修正すればいい。一緒にね。僕は、本当に取り返しのつかないことなんて、そんなにたくさんは無いと思ってるから」

おれの目を真つすぐに見つめながらそう言っ

て。王子は、穏やかに微笑んだ。

「とはいえ、やっぱり、僕もすごく心配だけどね。和希ちゃんの気持ちを疑う気はまったくないけど……君はとても、人気があるから」

「おまえがそれを言うか？ 学校に親衛隊までもってる王子様が」

思わず脱力して突っ込んだが、王子は真剣そのものの表情だ。

「いつ悪い虫が寄ってこないかと気が気じゃない。君ほどかくわしく魅力的な花は、他にないんだから」

「……』恋は盲目』って言葉知ってるか？」

「うん、恋は魔法のようなもの、ともいうよね。でも僕は、この魔法が一生覚めない自信があるよ。世界で一番、君が綺麗だ」

「……ばあちゃんになっても、おれが一番に見えるっの？」

半分呆れながら尋ねたところ、王子は極上の笑顔で言いきった。

「余裕」

……………参りました。

もう恥ずかしいやら嬉しいやらでいたたまれず絶句していたところ、王子はこらえきれなくなったように、今度はほおに唇を寄せてきた。

「好きだよ、和希ちゃん。大好き」

「おい、梓茶、こんなところで……」

「可愛い。好きだ。可愛い。可愛い」

あご。鼻。耳。まぶたの上……いたるところに、愛の言葉とともに注がれるキスの嵐。

「やめろって、人が来たら……」

抗議の声は、欲ばりなキスで閉ざされた。

少しだけ強引で、とびきり甘美な、くらくらするような調べに、突き放す気力もすべて溶け落とされながら。

いつのまにか、すっかり王子のかける「魔法」の虜になっている自分を、全身で感じていた。

Episode 3 王子（後書き）

人が来る気配があれば王子は何気ない風ですぐ離れると思います。
和希だけわたわたw

Episode 4 悠斗 (前書き)

まさかのかんな視点(笑) 後半から和希に移ります。
まだ両片想い状態。あああ甘酸っぱい〜と悶絶しつつの執筆で
したw

Episode 4 悠斗

飾り立てられてチカチカ輝く大きなツリー。

鳴り響く陽気なクリスマスソング。

ざつくばらんにはしゃぐ20名ほどの高校生たち。

12月中旬の日曜日、昼下がり。木鹿かんなの両親がやっているイタリアンレストランを貸しきって開催された美楠高校1-Aのクリスマスパーティーは、なかなかの盛況ぶりを見せていた。

「お疲れ様、バカちゃん」

かんなは、女サントアの衣装で近付いてきた親友 羽鳥和希にねぎらいの言葉をかけた。気の抜けたようにふにやっと笑いながら、小さくうなづく和希。

お人よしのこの親友は、いつのまにかこの企画の幹事を任せられ、今まで準備から司会進行まで大忙しだったのだ。

ようやく全てのイベントが終了し、あとはそれぞれが軽食をつまみながら歓談するフリータイム。

ずっと前に立ってハイテンションで盛り上げていたので、そうとう疲れたことだろう。お役御免となった和希は、どこかボーっとして、心あらずといった様子だ。

「ねえねえ和希ちゃん。今日は蒼木くんは？」

「悠斗は剣道の練習のあと顔を出すって言ってたけど……」

くるんだ、とテンションを上げて離れていく女子数名を複雑そうな表情で見送る和希に、かんなはにんまりとほおを緩めた。

「一見冷たい感じで近寄りたから王子先輩や金城先輩ほど騒がれてないけど、蒼木くんもかなりモテるのよ」

「……だろうな」

「いつまでも待っていてくれるとも限らないんだから」

さらりと言つてやると、ギクリとしたように身を強張らせて、なぜ知つてるとばかりに啞然^{あせん}と瞬きしてくる和希。

教室で毎日ずっと一緒なのだ。蒼木悠斗がいつもさりげなく和希に特別な眼差しを注いでいることには、とつくに気付いていた。

体育祭を機に悠斗がどこか吹っ切れた様子になったので、ついに告白したかなと予想して。

2人が付き合いだした気配はなかったけれど、最近、悠斗に対する和希の反応がだんだん変化してきたことも、お見通しだった。

動揺する和希に、あー可愛い、と和みつつも「報道部の観察眼をなめるなよ」と小突いてやったが、抱き寄せた体はあまりにも力がなく、妙に熱かった。

かななが眉を寄せたその時。

シャランと鳴ったベルとともに店のドアが開き、歓声が沸く。

「蒼木ー、遅いぞ！」

「この後カラオケ行こうかって話してたんだけど、どーする？」

寄つて来たクラスメートに低音でぼそりと詫びながら、店内に視線を巡らせた悠斗の瞳が、瞬間、かななを射抜いてドキツとする。

いやいや、彼が見てるのは私じゃなくて、と内心苦笑しながらも、みるみる険しくなる眼差しを不思議に思っていたら、悠斗が上着も脱がないままずんずんと近付いてきた。

「この、馬鹿」

いきなり和希にそんな罵声はせいを浴びせるや、かんなに向き直る。

「今、進行はどの辺？」

「えと、イベントは全部終わって、あとはフリータイム」

「後片付け、任せていいか？ ……熱だしてるから連れて帰る」

かんながうなずくや、和希をうながして入り口まで戻る悠斗。なされるがままの彼女にコートやニット帽をかぶせて身支度を整えようと、そのまま手を引いて出て行ってしまった。

あつという間の出来事に、虚をつかれた様に静まり返っていたクラスメート達が、数拍置いてからおおおおとざわめきだす。

「体調……悪かったんだ」

全然そんなそぶりを見せずに、元気に司会をしていたから、思いもよらなかった。上気したほおも、てつきり緊張のせいかとばかり。

私の観察力もまだまだわ、と軽く落ち込んだかんなだったが、いやこの場合、と思い直す。

「さすが幼馴染って感じ……？」

店の外に出ると、一面灰色の冬空。耳まで凍りそうな、底冷えする寒気に襲われて、和希は思わず身をすくめる。

白い息を吐き出しながら、仏頂面のまま自分のマフラーを外して和希の首にぐるぐる巻きつけると、悠斗は背中を向けた。腰を落として、「ほら」とうながす。

「……………」

正直ふらふらだったので、好意に甘えて寄りかかった。

「この様子だと、朝から具合悪かっただろう？ 幹事の責任はわかるが、無茶するな」

「うん……………」

「迷惑とかじゃなくて……………」

言いよどむ悠斗の言葉には上らない想いは、だけどちゃんと伝わってきて、ぎゅーっと胸が締め付けられるような感じがした。

“心配だから。”

密着した体温が、温かかった。

悠斗の背中に負ふわれて、ものすごく安心感を覚えながらも、妙に早くなっている鼓動を、火照ったからだ全体で感じる。

しんどいのに、ふわふわする。だけどやっぱり、苦しい。

大通りで呼び止めたタクシーに乗り込んで、車内の暖かさに安堵あんどしつつもはつきりと名残惜しさを感じてしまった自分に、和希は深々とため息をついた。

「大丈夫か？」

気遣わしげにのぞきこむ悠斗にうなずき返しながら、内心では、
全然、とうそぶく。

……重症、です。

自宅前でポケットやらカバンやらを一通りあさった後、青ざめた
和希は、力ない口調で言った。

「悠斗……どうしよう。鍵が、ない」

「落としたか……？」

悠斗はどつと疲れたように肩を落としたが、すぐに「こい」と和
希の腕をひいた。

向かう先は、隣の蒼木家。

芽生は今日、悠斗の家族4人と某ネズミの国に遊びに行っていた。
本来はパーティーの後、和希達も合流する予定だったのだ。

「おまえだけでも、行ってこいよ」

悠斗のベッドに寝かされて、けほけほ、と咳き込みながらもそう
言ったところ、すさまじく呆れたような顔をされた。

「おまえさ……それで俺が『悪いな』とか言いながら出て行くと思
うか？」

「……………」

「無駄にしゃべって体力使うな」

ビシリといいつつ、和希の額に冷却ジェルシートを貼る。ひやり

とした感触に、一瞬背筋がしなつたが、気持ちよかつた。

いつも言動は素っ気無いし、きついことも言うけど、悠斗は優しい。

和希が困っていると、自分が大変な時でも必ず力を貸してくれるし、他の人は気付かないささいな変化も、すぐに察してくれる。

(てか、やばいって。このベッド)

具体的にどんな感じ、とは言えないけれど。

(なんか、悠斗の匂いが、する……)

こんな状況だと、風邪を治すにも治せない。

ちつとも落ち着いて休めない。

「……鍵、木鹿のところに落ちてたらしい。取りに行ってくる」

話していたケータイをパタリと閉じて立ち上がった悠斗が、不意に静止して、振り返る。

とっさにつかんだ、服のすそ。

涼やかな瞳がみるみる驚きに見開かれる様に、半身を起こした和希もハツと我に返って握った手を離れた。

「ごめんっ……」

何やってんだおれ、と無自覚の行動にパニくりながら謝ると、悠斗は「そんなに辛いのか？」と少しだけ首を傾げて、ひたいに手を当ててきた。

その、手が触れた瞬間。

今度はポロツと涙が零れ落ちたものだから、和希はなおさら混乱した。

悠斗は完全に固まっている。

「……かなに、『いつまでも待っていてくれるとも限らない』って言われて」

何言ってるんだろう。突拍子がなさ過ぎる。

めまいのする頭でそう思ったけれど、セーブが効かなかった。

「おまえが、他の子に優しくしてるのとか想像すると、もやもやして、すごく、嫌な気持ちになって……」

全身に広がる熱で色んな感覚がおかしくなってるようで、涙も口も止まらない。

ただ、伝えたかった。

「なんか、おれ。いつのまにか、すごく、悠斗のこと……」

好きになってたみたいだ、という言葉は、途中からぐもった音となった。

ドクンドクンと早めの鼓動が、すぐ間近で鳴っていた。

強い力で抱きすくめられて、痛いくらい。

「……悠斗。ちょっと、苦しい」

「悪い」

腕の拘束くわすつが緩み、少し離れて見上げた悠斗の顔は、風邪がうつったのかってくらい赤かった。

「……あとになって、熱のせいで勘違いでした、つてのは無しだぞ」
「うん。それはない」

思わず顔をほころばせて否定すると、悠斗も、笑った。

「ぐちゃぐちゃだな……」

ハンカチを取り出して、和希の顔をぬぐう。

「おまえもちよっと、目、潤んでる？」

「うるさい。……鍵、取ってくるから」

「うん」

からだは重いし、あちこち痛かったけれど、胸につかえていた想いを渡せたことで、すごく楽になっていた。

なんともいえない、幸福感。

布団をかぶってせえせえ言いながらもくすぐったい気持ちでにまにましていたら、上着を羽織った悠斗が、また近づいてきた。

「……？」

目を瞬く和希の上に、影がかかって そっと、唇が、合わさる。

「……『おまじない』」

少し悪戯いたずらっぽくそう言ってから、すぐに顔を背けて、出て行く悠斗。

扉の向こうに消えたすらりとした残像をぼんやりと見つめていた
和希は、やがて、がばつと枕に顔を伏せた。

「……ばか。全然、効かないって……！」

熱はもはや、どこまでも上がる一方だった。

Episodes ロン (前書き)

シリアスにしようとするところでもダークになるので、真逆から
のアプローチになりました。ある意味、原点回帰(笑)

Episode 5 ロン

「和希チャン〜メリー・クリ ス」
「アホかああああああ」

待ち合わせ場所の街角に笑顔で駆け寄ってきたロンに、おれは全力で回し蹴りをかました。

ぐぼおつと叫びを上げながら、細身の体が屈みこむ。

「あ、愛が痛い……でも気持ちいい……」

「ありえねーだろ、いきなり第一声からR15枠もぶち破る放送禁止用語を叫ぶなっ」

「まあまあ、今日はクリスマススイブ。世の恋人たちが多少のハメをはずしても許されるスペシャルデーでしょ？ まあ実際はハメをはずすっつーよりむしろハメまくり」

「帰る」

「すみませんっした！ 許してにゃんまげ！」

くるりと背を向けたおれの肩をグツとつかんで引き留めるロン。

「こんな形でクリスマス終了のお知らせなんてイヤ〜ッ。せっかく気合入れて綿密なデートプランたててきたのになっ」

「プラン？ ただブラブラするだけじゃなかったのか？」

振り返ったおれに、チツチツチ、とロンは芝居がかった仕草で人差し指を左右に振った。

「まずはいつも通りゲーセン行ったりカラオケしたりその辺のシヨップのぞいたりして徘徊はいかいするでしょ〜？」

「徘徊言つな」

「その後は、ミシエランに三つ星をつけられたのに店長が断つたせいでガイドに掲載されなかった……かどうかは知らないけどそこそこイケてる夜景の見えるレストランでディナー」

「え、マジで!？」

「そして和希チャンが百万ドルの夜景にうつとりしている間に食事に媚薬びやくを混ぜてめくるめく性夜を」

「帰る」

「ジョークに決まってるでしょー。ほんのジョーク!」

いやおまえは油断しているとマジでやるだろ、とげっそりするおれの肩を抱いて、「んじゃ、いこっか」と歩き出すロン。

ニヤニヤ笑いが張り付いた読めない笑顔を眺めていたら、ふと前から聞きたかった一つの疑問が頭に浮かんできた。ちょっと照れるけど、きいてみよう。

「なあ、おまえは、おれのどこが好きで付き合ってるわけ?」

「え? カラダ」

即答かよ! 最低だ!

「部位的には脚? でも泣き顔も好きだし、啼なき声も可愛いし。和希チャンは? オレのどこが好き?」

「いや、そんな真剣に悩まれても」

まーレンアイは理屈じゃないってね、とケラケラ笑うロンだった

が……本当に、おれ、なんでこんな奴と付き合ってるんだろう……
(遠い目)

「気づいたか」

目を開けると、おれは口をガムテープで塞がれ、両手足を拘束されて冷たい床の上に転がされていた。ってなんだこの超展開！？
目の前には、無精ひげを生やした見知らぬオッサン……落ち着け、落ち着けおれ。なんでこんなことになってるのか、落ち着いて思いつくんだ。

えっと、たしかロンとデートしてて、ほんとにあいつが高層レストラんに予約入れたことにすっげービックリして。しかもちゃんとプレゼントまで用意してくれててちょっといいムードになったあと、おれがトイレで席を立ったんだ。店の外にあるトイレから出たところで、いきなり後ろから口元に布を当てられて気を失って。

「悪いねお嬢ちゃん、あんたにはなんの恨みもないけど……」

オッサンはしゃがれ声でそう言いながら、手にしたおれのケータイを耳に当てる。

「道家ロン、だな？ あんたの彼女は預かった。返してほしかったら、これから言う場所に500万持って来い」

おいおい、もしかしなくてもこの状況、誘拐事件に巻き込まれた！？

青ざめるおれの前で、男はいら立たしげに顔を歪める。

「あんたが資産家の息子だって情報はつかんでんだよ。そんなくらの金、なんとかなんだろ!? ……言っておくが、親や警察に言ったら彼女の命はねえからな。……オイ、わかってんのか? マジだぞこれ。……」わかっただ、証拠を聞かせてやるよ」

電話で話すうちにどんどん怒りの形相になっていた誘拐犯は、乱暴におれを抱き起すと、口元のガムテを外して受話器を押し当てた。

「ロン！」

「『あつれー、本気の本気でさらわれちゃった?』」

電話越しに、脳天気そのものなあいつの声が聞こえてきた。この態度では、誘拐犯のカンにさわるのももつともだろう。

「わかつただろ? わかつたなら……………オイ、こら……………こちらとら気がたつてんだ。あんまりふざけたことばっか抜かしてるとこの女がどうなるか……………なっ……………こんの……………クソガキがあっ……………!」

怒鳴り声を上げた誘拐犯だったが、不意にぼかんとしたようにケータイを見つめ、またみるみる紅潮し始めた。おれを見下ろしてわめく。

「おいコラ、おめー、道家ロンの恋人じゃなかったのかよ!? あのガキ、『オッケーオッケー、<ピー>すときは撮影よろしく』とか言っただけ勝手に電話切りやがったぞ!」

……………そーゆー奴です(泣)

誘拐犯は「なんなんだ畜生!」といきり立ちながら、考えをまとめるようにつろつろと歩き回り始めた。

地べたに転がされたおれは、舞い上がったほこりを吸い込み、ゲホゲホと咳き込むはめになる。

どこかの、使われていない倉庫のような場所。窓は全て黒いカーテンで覆われ、今が夜なのか朝なのか、気を失った間にいつたいたいどこまで運ばれてきたのか、検討もつかない。

身を揺すった弾みに、首につけていたプレートネックレスがチャリンと鳴った。

……ロンにもらった、クリスマスプレゼント。

ちよつとチエーンはごつめだけど、シンプルで身につけやすい、素直にいいなと思えるデザインで。ちゃんとおれの趣味を考えて選んでくれたんだと、すごく嬉しかったのに……。

思わずにじんだ涙を、こらえる。

落ち込んでる場合じゃねえ。なんとかこの状況を打開しないと……。

おれはすうつと息を吸い込むと、全力で声をはりあげた。

「誰かあー！助けてー！。助けてー！」

「うるせえ！ っただけ声上げててもこの辺は滅多に人がこねえし、そもそもここは防音なんだよ」

「助けてー！助けるー！」

「うるせー！っつてんだろ、黙れこのガキ！」

胸倉をつかまれたが、半ばやけくそで叫び続けた。

「ばかロンーあつさり見捨てやがって！ アホ！ オニ！ 人でなし！ サディスト！ 変態！ 冷血人間！ てめーには血も涙もねえのか！」

ならご主人様って言ってみる！」

「ご、ご主人……様」

「ギヤハハハッ、本当にいってやんの。バーカ、たったこれしきでオレ様の気が済むわけねーだろこのくピー>野郎がっ」

「おい……ロン、もうやめろ」

あまりのえげつないやり方にドン引きしながら止めたおれに、ロンは壊れた笑みを浮かべながら振り返る。

「なんで？ 正当防衛でしょ？ オレの和希チャンに手え出しとい
て、これだけで済むと思われてもねえ？」

「いや、おまえもはやそれただの口実だろ……！ これ以上やるなら、警察呼ぶぞ！」

何か、何かおかしい……！ と思いつつも必死で呼びかけると、
ロンはチツと舌打ちして男から離れた。

車の後部座席からロープを取り出して、「実演、亀甲縛りい〜」
などとうそぶきながらいつのまにやら気絶したらしき誘拐犯を慣れた
手つきで緊縛する。

「なんでここがわかったんだ……それにこの車。おまえ免許もって
ないよな？」

足の拘束を解かれながら尋ねたところ、ロンは「ん〜？」と視線
を巡らせた。

「愛の力ってヤツかな。今夜はカー ツクスもいいな〜と思ってあ
らかじめうちの車を駐車場に停めてたんだよね 免許はないけど
大丈夫、レーシングゲームはオレ、プロ級だし（グツ）」

ああああ突っ込みどころが多すぎてまにあわねえ……！

はあくっと大きいため息をついたおれだったが、なんか段々腹が立ってきた。ぎゅっと両手を握り締めて、唇をかみ締める。

「あり？ 和希ちゃん？ ……もしかしてマジで見捨てられたと思っただ？」

「……………」
「そんなことするわけないじゃん」
「……………」

和希ちゃんってば〜とのぞきこんできたロンの目に、フツと凶暴な光が宿った、と思った瞬間。

後頭部をガツとつかまれ、顔を上向かされる。

直後にロンは、未だ手を縛られたまままで抵抗できないおれを、咬みつくような口づけで蹂躪してきた。

「ぶっ……………んっ……………」

呼吸まで奪いつくそうとするような、獰猛なキス。けして逃すまいと執拗に絡み、責めたてる。

苦しい。

くちゆくちゆ、と流し込まれる唾液を飲み込む隙も与えられず、唇の端から細い糸が零れ落ちた。

ようやく解放され、はあっはあっ、と酸欠寸前で荒い息を吐くおれの唇の周りをゆっくりと舐めまわした後、軽くもう一度下唇に咬みついてから、ロンは薄く笑った。うっとり。

「こんなカワイイ子、手放すわけないじゃん。あんたを虐めていい

のはもう、オレだけの特権だぜ？」
「……………」

言い返したかったけれど、頭がぼうつとして思うようにならない。足腰もガクガクして力が入らず、床に腰を下ろしたままだったところ、車のトランクからなにやら箱を取り出してくるロン。

「実はクリスマスプレゼント、他にも色々用意してきたんだよね」

またガラリとおどけた口調に戻って取りあげてみせたのは、見るもいかがわしい器具の数々……てちよつとまてええええ！？

「おいコラ、何考えてやがる……………！」

サーツと蒼白になって座ったまま後ずさるおれに、「平気平気」と邪悪そのものの笑顔で近付いてくるロン。

「ここ、本当に滅多に人こない感じの場所だから。もしかしたらってことはあるけど、だからこそスリリングでしょ？」

「ちよ、まて、バカ、ふざけんなっ」

「クスクス、嫌がつてみせても、ほんとは好きなくせに……。忘れられない夜にしてあ・げ・る」

「やめる、こら、やつ……………！！！」

ちなみに。ロンがすぐにこの場所が分かったのは、もらったネットレスに発信器がついていたからだだったとき。

めでたしめでたし て、めでたくねええええええ（絶叫）

Episodes ロン (後書き)

本当に、なんでこんなやつ好きになっただらろう、和希……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8831y/>

『ときメロ』マルチエンディング集

2011年12月16日08時47分発行